OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	正月用引札の広告機能 : 女性主題の変遷を手がかりに
Author(s)	熊倉, 一紗
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

正月用引札の広告機能
── 女性主題の変遷を手がかりに ──

熊　倉　一　紗
京都造形芸術大学

キーワード
正月用引札，広告，機能，女性，吉祥
Shôgatsuyô hikifuda (New year's flyer), advertising, function, woman, auspiciousness

はじめに
第１章　女性主題の図像分析
第２章　歴史的＝社会的状況との連関
第３章　正月用引札の広告機能
おわりに

はじめに

明治から大正期にかけての正月，日本各地において商店主たちが顧客を訪問し，年末年始の挨拶とともに印刷物を配るという光景が繰り広げられていた。現在「正月用引札」と呼称されているものがそれである[1]。当時娯楽は少なく，主に機械刷木版という技法で制作された色鮮やかな正月用引札は配布後家中に貼付され，人気を博していた。

図１　大黒と福助　1903年

正月用引札は，「引札」，すなわち商売情報を告知し，来店や商品の購入を勧める配り札の名で呼ばれるだけあって，確かに画面の左には，商売名・商店の所在地・商店（主）名が記されている。さらにとりわけ「正月用」と呼ぶのは，正月という特殊な時期に配られるからで，主題としては恵比須・大黒をはじめとする伝統的な吉祥図像が最も多く描かれている（図１）。ところが，その一方で，一見したところ正月に相応しい吉祥図像とは相容れないような図像がある時期から頻出するようになる。当世の女性を主題とする図像がその代表的なもので，その数量は恵比須・大黒などの福神を主題とする図像に次ぐほどである[2]（図２）。

従来，正月用引札については，「広告を兼ねたサービス品」で「固定客確保に効果を挙げた広告物」，すなわち得意先の囲い込みを目的とした独特な役割が指摘されてきた[3]。また，近年

では，正月用引札の出自に関する指摘もあり，例えば「広告的な機能面からは引札，画像情報メディアとしては錦絵，暦を知るという実生活上の機能面からは大小，新年の祝賀の品としては摺物の系譜を引く」といったように，近世における複数の媒体の系譜に連なることが言及されている[4]。しかしながら，これまで広告としての機能の内実については十分に議論されてきたとは言い難い。本論の課題は，女性を主題とする図像群に焦点をあて，その通時的変遷を追跡し，さらにその変遷を歴史的＝社会的状況と連動させることによって，正月用引札の広告としての機能が果たしてどのようなものであったのかを明らかにすることにある。

図2　買物する女性　1901年

この課題を達成するために，次の順序で論を進める。まず第１章において，制作年が判明している女性主題77点を取り上げ，時代ごとにおける特徴を指摘する。次に第２章においては，その特徴と，同時代の歴史的＝社会的状況との連関性を明らかにし，さらにそれらの図像が意味していたことを示す。第３章においては，商店主と顧客とのコミュニケーションに注目することによって，正月用引札が果たしていた広告としての機能の内実を明らかにする。

第１章　女性主題の図像分析

筆者が収集した資料のうち[5]，制作年が判明している586点を調査したところ，最も数量が多いのは伝統的吉祥図像を中心とする神仙画題で204点，次が当世の人々の様子を捉えた風俗画題で145点となっている。この風俗画題中最も多く描かれているのが女性を主題とする図像群で90点，割合にして62％と高い比率を示す。本論では，なかでも数量の多い明治期の77点に絞って考察する。とはいえ，これらは現在手に入る資料に限られるため，現時点での判断結果であることを付記しておきたい。参考資料として添付した表は，この77点の女性主題の内容を示したものである。左から「制作年」，画面内に書き込まれた「商店名」「商品名」，そして「サイズ」から「モチーフ」と続きその横の数字は描かれた人数を示す。その次が描かれた人物の「身装」で，次項目は人物の「行為」，最後は画面中に書き込まれた商店や商品に関する情報と図像内容との「関連」の有無を示している。各々の項目を抽出したのは，描写対象の特徴を詳細に把握するためであるが，とりわけ「身装」は，流行現象だけでなく属性といった女性をとりまく様相を色濃く映し出し，「行為」に関しても外見からではわからない女性に要求された役割を表出していると考えたからである。「関連」は，商売情報と図像内容に関係がないものが多いなかでどのような動向を示すのか明らかにするためである。

さて，この表を見て指摘できるのは，第一に明治36年（1903）あたりまで，女性の身装が

結髪・服装ともに和装で，呉服店などにおいて反物を見たり買い物をしたりといった行為をし，商売情報と図像が直接関連するものが多いということである。第二に明治37年（1904）頃から明治40年（1907），41年（1908）にかけて，洋装とりわけドレス姿で，男性に三方を差し出すといった何かしらの行為をしている女性が頻出している点である。第三に明治40年（1907）頃から44年（1911）にかけて，結髪は束髪，服装は和服といった和洋折衷スタイルで，物などを持ちながら左を向くといったようにとりたてて具体的な行為や活動をしているわけではない女性が現れだすということである。以上の検証結果に則り，以降ではこうした傾向が認められるそれぞれの時期において，女性たちがどのように描かれているのか具体的に見ていきたい。

まずは，明治34年（1901）から36年（1903）にかけて多く見られた女性についてである。例えば，図２を見ると，向かって左には，唐人髷に花簪を差した女性が紅地の反物を手に取り，右の女性と品定めをしている。服装は青の矢絣文に黄色の縦縞が入ったお召であり，白くたおやかな指には指輪が光る。右の女性は，髪を島田に結い玉簪を差していることから，左の女性よりも少し年齢は上のようである。水色の小袖に橙色の帯をしめ，指にはやはり指輪が認められる。当時庶民には高嶺の花であった宝飾品や華美なお召し物をまとっていることから彼女たちは富裕層の娘たちと考えられる。この他にも，盛装の女性や子供が店頭にいるものをいくつか見出すことができる（図３）。このように，明治34年（1901）から36年（1903）頃にかけては，富裕層に属すと思しき女性が繁盛している商店を背後に，前景に目立つように大きく描かれているのが特徴と言える。

図３　買物する女性　1902年

続いて，明治37年（1904）以降，40年（1907），41年（1908）にかけて頻出する洋装をまとった女性を見てみる。図４は，明治37年（1904）に制作されたものであるが，画面中央，向かって左には鮮やかなピンクのローブ・デコルテ，宝冠やネックレスを身にまとった女性がおり勲章を載せた三方を持っている。右の男性は，勲章を付けた軍服を着，盃を右手に持ちながら椅子に座っている。こうした身なりは，彼らが皇族あるいは華族といった上流階級に属す人物であることを明白に示している。男性は，目がつり上がった厳めしい顔つきであり，胸を張り，足を大きく広げて座っている。女性は，直接地面に座り，三方を恭しく差し出している。男性の頭を頂点

図４　上流階級の男女　1904年

とする三角形構図からは，男性の女性に対する優位性，女性の従属性がはっきりと見いだせるだろう。

図５に描かれた女性もまた，ローブ・デコルテ，宝飾品，さらに勲章をつけるための大綬をまとっている。やはり皇族，あるいは華族といった上流階級に属す人物と思われる。しかし，頭には宝冠の代わりに大きな花簪，右手には「中将湯」と書かれた旗を振りかざしている。左には「中将湯本舗　津村順天堂」の文言。つまり，ローブ・デコルテをまとった女性は，津村順天堂のキャラクター，中将姫というわけである。画面の左下を見ると，四人の子供が列をなし，数百トンはある機関車を引っ張っている。画面上下に書かれた「強壮の愛児は健康なる婦人より生る　健康なる婦人は中将湯の服用より来る」の「強壮さ」を誇張したものに違いない。となれば，「健康なる婦人」は，右上のドレスを着た中将姫であると思われ，子供たちの母親としてのイメージが重ね合わされているといえる。以上のことから，明治37年（1904）から41年（1908）頃に特徴的な女性は，夫に仕え子供を見守る上流階級の女性の様子を捉えたものであるということができよう。

図５　上流階級の女性　1906年

最後は，主に明治40年（1907）頃から44年（1911）に出現する女性についてである。図６は，明治41年（1908）に制作されたもので，画面上には腰から上半身の女性が大きく描かれている。庇髪にリボンを結んだ髪型，緋色に笹の文様の和服といった和洋折衷スタイルで，明治末期の流行をまさに体現している。特に具体的な行為をしておらず，羽子板を持って左を見ているだけである。背景には奥行きがなく平面的であるため，女性の存在が強調されているといえるだろう。この他にも同時期に出現し，同じような傾向を持つものを幾つか挙げることができる（図７）。以上，この時期の特徴をまとめるならば，流行の身なりをし，具体的行為をしているわけではない女性たちが近接拡大で描かれている，すなわち女性の外貌部分が強調して描かれていることが指摘できるのである。

図６　庇髪の女性　1908年

図７　庇髪の女性　1910年

第２章　歴史的＝社会的状況との連関

では，女性主題の図像がこのような特徴を示す背景には何があったのだろうか。このことを明らかにするために，当時の歴史的＝社会的状況との連関性に注目し，考察したいと思う。

まず，明治34年（1901）から36年（1903）に集中して呉服店などの店頭・店内の様子が描かれた背景の一つに，この時期の小売業の発展が挙げられる。明治34年（1901）から36年（1903）頃といえば，ちょうど日清戦争と日露戦争の戦間期にあたる。日清戦争の勝利によってもたらされた賠償金が重工業の育成に役割を果たし，工場制手工業を中心とした産業資本の形成を促すことになった[6]。産業構造においては，明治11年（1878）～15年（1882）では，第二次産業は雇用率5.6％，実質所得率は10.0％であったが，明治26年（1893）から30年（1897）になると，雇用率が10.4％，実質所得率が18.0％とほぼ倍の上昇を示す[7]。このように農業中心から工業中心の社会へと改変しつつあり生産体制の拡大が小売業の発展をもたらすことになった。例えば，明治30年（1897）以降，物品販売業営業者一人あたりの従業員数は低落傾向を示しているものの，少なくとも明治後期から大正後期にかけて生産性は落ちなかったようである[8]。とりわけ女性主題における店頭風景では，呉服店によるものが頻出するのだが，この背景には呉服を含む繊維業の隆昌が著しかったことがある。『日本全国商工人名録』（明治31年）を用いて取扱商品別商業者の全国分布を調査した松本貴典氏によると，この当時，繊維商は全国で9,438人いるという[9]。なかでも織物商 ── 呉服太物商が最も多い ── は，5,687人にのぼり，また地域に偏ることなく全国にあまねく存在していたようである[10]。

また，この時期，盛装の女性達が描かれていたことにも注目したい。こうした女性たちが「庶民の憧れ」であったのは当然だろう。ここでは一歩進んで，その「憧れ」の内実を考えるために，この当時依然として消費活動が活発ではなかったことに目を向けたい。例えば，明治以降における個人消費支出を算出した篠原三代平氏によれば，明治30年代（1897～1906）では被服費は10ヵ年平均６％の割合，教養・娯楽その他にかかる費用は平均5.9％の割合であった[11]。こうした経済状況を鑑みれば，モノ ── 食料品などを除く ── を購買し消費するということ事態それほど頻繁になされていたわけではないということが窺い知れよう。正月用引札の前景に大きく描かれた女性たちは単に財力の保有というだけでなく，明治には縁遠かった豊かな消費生活を示しているという点で，庶民とは異なる「富裕層」だったのである。このように正月用引札における購買する女性たちは，豊かな消費生活という理想性を表しているといえるのである。

次に，明治37年（1904）を境に上流階級の女性が頻出するようになった理由について考えてみたい。まず一つに，明治37年（1904）に日露戦争が勃発し，この時期，日本ではナショナリズム思想が広まっていたことが挙げられる。このような思潮の中で，国力の増強を図ろう

とする近代国家は，健全な兵士や労働力を再生産する女性の妻・母としての立場を強化するようになる。つまり，女性を国家に有益な国民とするイデオロギー・良妻賢母の再配置化である。この良妻賢母の手本として駆り出されたのが，他ならぬ上流階級の皇族・華族の女性たちであった。若桑みどり氏は，皇族・華族女性の頂点に君臨する明治天皇の妻・昭憲皇太后の理想性について次のように述べる。

> 天皇の最良の伴侶として，政治に容喙せず，みずからの分を守りながら，内助の功をよくした「理想の妻」であったこと。（中略）夫婦，親子の人倫を守り，女性教育と国民福祉に献身する慈悲の女神であり，女性道徳の体現者であった[12]。

さらに他の皇族の女性について当時の婦人雑誌の言及を参照してみれば，明治37年（1904）刊行の『婦人界』に，梨本宮妃伊都子に関する記事が掲載されている。女流歌人で名士でもあった遠山稲子は次のように述べている。

> 去る明治三十三年に入つて梨本宮妃殿下と成らせらるゝや未だ御年少の御身をもて，外は交際場裡の事より，内は宮殿下に仕え奉りて貞淑の御徳高く在しますは申す迄も無く，召使いなど端した無きものに至る迄此上無う御仁慈を垂れさせ給ふ[13]

まさに，夫に仕える従順な妻という役割が強調されている。先程の図４において，夫に三方を恭しく差し出す妻が描かれていた背景には，こうした皇族・華族の良き妻としての理想的姿があったものと考えられる。

では，健康と上流階級の女性とが結びつけられる背景には何があったのだろうか。女性が健康に注意する必要性をいち早く説いたのは福沢諭吉である。彼は，明治18年（1885），自らが主催する『時事新報』に「日本婦人論」と題した社説を掲載し，女性の人種改良の必要性を説くのであるが，それは母の身体を強壮にして好子孫を求めるためであるとしている[14]。まさに「強壮なる愛児は健康なる婦人より生る」というキャッチフレーズを先取りしたものである。また，医学博士で学校衛生の生みの親であった三島通良は，明治37年（1904）刊行の『婦人界』中で，体育教育に力を入れ始めた10年前から上流階級の若い女性の身体発育が進んできたと述べている[15]。この三島の発言を裏付けているのが，この記事のちょうど10年前の明治27年（1894）に初めて開催された華族女学校の運動会である。皇族・華族のお嬢さまが体を動かすことについては強い反発があったことであろう。しかし，体育振興の一環として，他の女学校に先駆けて運動会が開始されるに至るのである。

このように，上流階級の女性たちは，率先して壮健・健康な身体になることが要請されていた。もちろん，壮健で健康な身体になることは，強壮な子供を生み，そして育てるという，女性の果たすべき母としての役割に直結するものである[16]。普段は，十二単姿の中将姫が，洋装の女性の姿であえて描かれ，さらに，「健康なる婦人」が，その洋装の上流階級の女性に重ね合わされつつ，子どもを見守っている姿であったのは，こうした理由があったと思われる。このように，正月用引札に描かれた洋装の女性たちは，夫に仕え健康な子を生み育てる良妻賢母の模範としての理想を表しているといえるのである。

最後に，明治末期の40年頃から，女性の外貌部分を強調して描く女性が出現するに至った要因を探っていくことにする。その第一に挙げられるのは，明治40年頃から外貌の美の効用が喧しく説かれることになったことがある。例えば，当時，保守的内容で知られていた婦人雑誌『女鑑』では，明治30年代後半までは外見の美だけでなく「心の美」を養うべきという論調がもっぱら展開されていた[17]。例えば，明治38年（1905）刊行の『女鑑』（第15年第12号）では，華族女学校学監である下田歌子の記事「女性の美育」が掲載されているが，それは「先づ心の美より養ふべし。決して，形の美より養ふ可からず」という主張であった[18]。

ところが，このような論調に徐々に変化が見られるようになる。明治41年（1908）刊行の『女鑑』（第18年第１号）の巻頭にクラブ白粉の広告が載り始めると同時に，同年刊行の第２号には「美人となるの法」と題された美顔術専門家による化粧法が掲載されるようになるのである[19]。さらに，第７号には「美貌は幸福の要素なり」と題して次の記事が掲載される。

> 容貌を美しくするといふ事は，男女に関はらず必ず望むことで，殊に女子に於ては一層之を要求せらる（中略）各自が天より受け得たる容貌を美しくする事を心掛けなければならぬのである[20]。

このように，『女鑑』においては，明治40年代に突入し，化粧品広告が打ち出されるのとほぼ同時に，容貌の美を公然と追求するような論調が見え始めるのである[21]。

次に，第二の理由として挙げられるのは，視覚的メディアにおける外貌の美の称揚である。その先駆けだったのが，明治40年（1907）から41年（1908）にかけて，『時事新報』紙上で展開された「美人コンテスト」である[22]。ここでは，その意義として，良家の子女の美人写真がマスメディアに乗り衆目に晒された点を挙げたい。明治40年10月５日から，応募者の写真が時事新報紙上に掲載されることになり，以降毎号のように令嬢の美人写真が登場することになった。この「美人コンテスト」以来，婦人雑誌の口絵写真に良家の子女が頻繁に登場するようになり，容貌の美の追求を是とする風潮を助長することになったようである。とはいえ，こ

うした傾向に対する批判は少なからず存在していた。例えばそれは，『婦女新聞』［明治42年４月23日発行］の次のような社説に見られる。

> 同じ人物の写真にても，老いたるよりは若きを選び，醜婦よりも美人を採り，人格の高きよりも地位の高きを可とし，装飾なき平素の姿よりは，流行の髪を結ひ，流行の衣服を着て，流行の金銀珠玉を飾れるを適当とす。即ち婦人雑誌の口絵は，現代婦人の目に，最も美しと見え最も立派に感ぜらるゝすべての物を，網羅して陳列する場所となりたるなり。（中略）是等の口絵が及ぼす所の影響や如何，虚栄心の強気は，現代婦人の大患にして，之が為めに教育の効果も半減せらるゝごとき状態なる事は，何人も認むる所なるが，此の虚栄心を挑発し，煽動するものは，雑誌の口絵にあらずや[23]。

婦人雑誌の口絵において，人格や品性といった中身でなく，顔貌，服飾といった容姿を掲載することは，虚栄心を刺激するものだから良くないと糾弾しているのであるが，逆を言えば，婦人雑誌の口絵は，女性たちが容貌の美を公然と追求するのに一役も二役も買っていたことを明白に示している。だからこそ，影響の大きさもまた批判の対象となっているのであろう。

図８　化粧品広告　1908年

この化粧品業界の興隆，その後の各メディアによる外見美を求める状況は，正月用引札の女性主題に少なからぬ影響を与えている。例えば，図８は明治41年（1908）発行の『婦人世界』に掲載されている化粧品広告の写真だが，下の明治43年（1910）制作の正月用引札と比較すると，腰から上半身を捉えている点，両手で髪に触れているポーズ，顔の角度，見る側に向けられた眼差しなど，極めて類似することが指摘できる。また，女性が単体で見る者の方に眼差しを真っ直ぐに向けるという特徴は，いわゆる「美人画ポスター」とも似通い，さらに背景を有機的な草花で装飾するという特徴は，ミュシャのようなアール・ヌーヴォー期の西洋グラフィックとの関連性も指摘できよう。

図９　（図７）の部分　1910年

このことから，明治40年（1907）から44年（1911）にかけて頻出する女性主題は，こういった社会的状況あるいはメディア的趨勢を背景に登場したものといえ，それゆえに，外貌の美という理想をより強調して表現していると考えられるのである。もちろん，正月用引札における他の女性図像においても外見の美が表されているのは言うまでもない。しかしながら，明治40年以降に頻出する女性図像においては，こうした外貌の美という理想が，文字通り，ク

ロース・アップ（close-up）されているのである。

以上，明治34年（1901）から明治44年（1911）に至るまでの時期に，新たな女性主題が出現してきた背景について，歴史的＝社会的状況と関連させて見てきた。その結果，これらの女性主題は，時代状況の変化と極めて密接に連動した女性の理想的あり方，言い換えれば，女性にとって最も関心の高い，時代に即応した願望を表象していたことがわかる。これら女性主題は，一見すると吉祥主題とは程遠いように思われる。しかしながら，これらは世の女性たちが将来の実現を願う幸福状態をすでに表象として出現しているかぎりにおいて目出度いイメージである。それゆえ，新年を寿ぎ，未来の幸福を祈る正月という時期に相応しい近代に固有の寿祝性を備えた吉祥図像だといえよう。

第３章　正月用引札の広告機能

それでは，伝統的吉祥図像に加え，女性主題＝近代の吉祥図像を有する正月用引札の広告としての機能は果たしてどのようなものだったのだろうか。

商店主が顧客を訪問し，正月用引札を手渡すのは正月という特殊な状況においてであった。だからこそ，商店主は，正月という時期に相応しい目出度い吉祥図像 ── 伝統的であれ近代に固有であれ ── を顧客に贈答していたわけであるが，商店主はそうすることによって，新春の祝意を表出していたといえる。言い換えれば，正月用引札は商店主の新春の到来を慶び祝う気持ちという心情的情報を伝達する役割を果たしていたと考えられるのである。さらに，こうした新春の挨拶が毎年の決まった行為であり，儀礼化・慣習化していたことを鑑みれば，商店主が，正月用引札を配布していたのは，新春の祝意を表出することによって，顧客とのパーソナルな紐帯を確認・維持・強化するためであったといえるだろう。というのも，そこには言語学者であるローマン・ヤコブソン（Roman Jakobson）が言うところの交話的機能（phatic function），すなわち，発信者と受信者のコミュニケーションを確認し維持する言語の機能と同様の働きが認められるからである[24]。正月用引札は，まさしく，商店主と顧客との私的で濃密な人間関係を確認する役割を果たしていたと考えられるのである。さらに，時代状況の変化と極めて密接に連動しつつ，世の女性にとって最も関心の高い新たな女性主題が陸続と生み出されていった背景として，内容が常に同じになるマンネリ化と，それに伴う顧客の倦厭を避けることがあったと思われる。紋切り型の伝統的吉祥図像だけを提供するといった単調化を退け，人々の興味を引くような女性図像を常に開発していく必要性があったに違いない。

このように，正月用引札を配布することによって，商店主が顧客との親密な関係の構築に役立てようとし，それがある意味で広告として有効に機能しえていたと考えられる背後に，当時の商習慣がある。19世紀末から20世紀初頭における日本の都市では，小売商店の支配的な販

売方式は御用聞きや掛売りだった。すなわち，商店が顧客の家を訪問して注文をとり，商品を家まで配達したり，月極払いや節季払いといった信用が重視されていたのである。当然，商店主と顧客との関係は固定的・個人的・対面的なものとなるだろう。このような前近代的な商習慣システムであったからこそ，正月用引札はある意味で広告として有効に機能し，商店主たちに重宝されていたと思われるのである。

おわりに

以上のことから，正月用引札とは，商店主が，女性図像のような近代に固有の吉祥図像も含め目出度い図像を配布することによって新春の祝意を表出し，顧客とのパーソナルな紐帯を確認・維持・強化することによって商品の購入を促進しようとする，商店主と顧客との人格的関係に基づいた前近代的商売形態に固有の広告メディアであったとまとめることができるだろう。従来，正月用引札は，ときに広告として未熟なもの，取るに足りないものと見なされてきた[25]。しかしながら，女性図像のように，一見すると吉祥とは関係がないような図像をあえて採用し，さらに時代状況の変化と密接に連動しつつ，世の女性にとって最も関心の高い図像のヴァリエーションを新規開発し展開していった点に女性を掲載したこれまでの多くの広告と異なる正月用引札の特性がある。例えば，正月用引札に描かれた女性の表情をみれば，おしなべて画一的な描写であって生気が感じられるものではなかった。その理由とは ── 推測の域を出るものではないが ── 正月用引札に描かれた女性にとって重要なのは，表情に現れ出る女性の個別的内面性ではなく，時代状況の変化に即応した流行をすぐさま身にまとえるマネキン人形にも似た汎用性が重要だったからなのかもしれない。

このように，図像を通時的視座から分析し，歴史的＝社会的状況との連動性を考察することによって，図像がどのような意味を担っていたのかを明らかにし，さらにどのような場で広告としての機能を発揮していたのか，すなわち図像の内容や商店と顧客とのコミュニケーションに至るまで幅広い視野から考察を試みることによって，正月用引札が極めて合理的メカニズムによって広告として機能していたことが把握できるのである。

注

1　呼称については，現在「正月用引札」の他，単に「引札」や「絵びら（ビラ）」などが散見されるが，本論では「正月用引札」を採用する。というのも，単に「引札」といえば，おもに店への誘致や商品の効能を文章に書き起こし，それを不特定多数に一方的に配布することで直接的に来店や商品の購入を依頼し，なおかつ配布時期を問わないものを指し，また「絵びら（ビラ）」とは，絵を主体とし貼られることを念頭に置かれた宣伝・案内のための印刷物を意味しており，その点，正月という時期に

限定して商店が近所の顧客を訪問し年末年始の挨拶とともに配布していた「正月用引札」とは性質を異にするからである。

2　正月用引札のコレクションを有する博物館や収集家の報告では，恵比須や大黒を抜いて，女性を主題とするものがトップを占めているということが少なくない。例えば，愛媛県歴史文化博物館では平成12年度までに寄贈・寄託・購入を通じて168点が収蔵されているが，絵柄として最も多いのが，「和服姿の女性」44点，以下「恵比須」14点，「大黒恵比須」12点，「福助」８点，「七福神」３点，「大黒」２点となっている（井上淳「愛媛の引札」，愛媛県歴史文化博物館友の会編『愛媛県歴史文化博物館資料目録第８集　近代広告資料（引札）』，2001年，104〜105頁を参照）。

3　増田太次郎『引札・繪びら・錦繪廣告』，誠文堂新光社，1976年，73頁

4　加藤貴裕「引札の研究：正月用引札の実際と系譜」，『日本文化論年報』２，1999年，42頁

5　筆者は以下の図録や博物館，資料館，個人コレクションから正月用引札資料を収集した。荒俣宏・北原照久『繁昌図案エコノグラフィー』，マガジンハウス，1991年／印刷博物館編『引札 ── 消費文明を創ったポップアート』展図録，2001年／愛媛県歴史文化博物館編『資料目録第８集　近代広告資料（引札）』，2001年／王塚装飾古墳館編『ふるさと町家の引札』展図録，2000年／大阪引札研究会編『江戸・明治のチラシ広告　大阪の引札・絵びら　南木コレクション』，東方出版，1996年／大津市歴史博物館編『大津市制100周年記念特別展　家族の一世紀』展図録，1998年／花林舎編『田村コレクション　明治の引札』，紫紅社，1988年／北前船の里資料館編『北前船がもたらした華麗なる広告チラシ引札の世界』，（財）加賀市地域振興事業団，1999年／岐阜市歴史博物館編『館蔵品図録「引札」── 明治・大正の商業広告 ──』，1993年／群馬県歴史博物館編『お店の広告　おもしろ引札大図鑑』展図録，1999年／（財）橋本市文化スポーツ振興公社編『橋本市の引札』展図録，2003年／仙台市歴史民俗資料館編『あきないの民俗 ── 看板・引札・ちらし ──』展図録，2005年／高山市郷土館編『高山の看板・引札』展図録，1993年／津市教育委員会編『引札大図鑑・明治・大正のビラ，チラシ』展図録，1997年／天理ギャラリー編『明治の引札』展図録，1987年／東京アートディレクターズクラブ編『日本の広告　明治・大正・昭和　１ポスター』，美術出版社，1967年／藤井奨『讃岐の引札　広告に見る明治・大正浪漫』，四国新聞社，1996年／藤本毅『明治のチラシ広告　大阪・枚方の引札 ── 池田屋コレクション』，東方出版，1990年／森嘉紀『金沢の引札』，文一総合出版　1979年／早稲田大学図書館編『幕末・明治のメディア展 ──新聞・錦絵・引札 ──』，1987年／関西大学鬼洞文庫／神戸市立博物館館蔵品／大和銀文庫（大阪府立中之島図書館蔵）／坊垣内氏所蔵品／山口県立山口博物館館蔵品／大和郡山市教育委員会所蔵品。本論で使用する資料はランダムに収集したため，資料の性質として多少なりとも偏りがあることは否めない。だが，正月用引札は莫大な数が発行され，現在まで残存している。よって，全てを網羅することは到底できない。そこで，現在の時点で出来る限り手に入る資料に限定した。

6　菊池重雄，森淳一『小売商業史』，駿河台出版社，1975年，162頁

7　同前，163頁

8　松本貴典「近代日本の商業展開 ── 問屋業と物品販売業の全国動向の分析」，松本貴典編『生産と流

通の近代像 ── 100年前の日本』，日本評論社，2004年，390～391頁

9　松本貴典「近代日本の商人分布 ──『日本全国商工人名録』による検討」（松本貴典編，同上，434頁）によれば，東京，京都，大阪，新潟，兵庫，長野，神奈川，富山，愛知の三府六県で，全商業者の六割を占めるという。このように，大都市圏を中心に繊維商は栄えていたようである。

10　同前，434頁。また小木新造『東京時代 ── 江戸と東京の間で』（講談社，2006年，90頁）によれば，東京では，明治14年（1881）に215軒あった呉服商が，明治33年（1900）には1,434軒で6.7倍の増加を示したという証言もある。小木によると，明治14年（1881）の時点では，呉服商は日本橋を中心に神田や京橋界隈に多かったが，明治33年（1900）になると，東京の全域に広がり始めるという。それだけ一般庶民の着物に対する需要が高まったということを示唆している。

11　篠原三代平『長期経済統計６　個人消費支出』，東洋経済新報社，1967年，７頁

12　若桑みどり『皇后の肖像 ── 昭憲皇太后の表象と女性の国民化』，筑摩書房，2001年，80頁

13　遠山稲子「梨本宮妃殿下の御懿徳」，『婦人界』第３巻第10号，1904年，33頁

14　福沢諭吉「日本婦人論」，『福沢全集』，時事新報社，1898年，２頁

15　三島通良君談「人体美」，『婦人界』，第３巻第10号，1904年，70頁

16　当時の医学士・山根正次「婦人之健康」（『女学世界』第２巻第５号，1902年，２頁）には，「婦人の方が健康であれは最愛の子供もある其子供も健康である教育も充分に出来る，子供の出世を見ることも出来る，家事もよく修まる…」と記されている。

17　『女鑑』を取り上げるのは，それが「国粋的婦人啓蒙誌の代表格」，「良妻賢母主義の最も典型的な姿勢をうたいあげたもの」と称されるくらい，保守的な内容の雑誌だったからである。例えば，浜崎廣『女性誌の源流 ── 女の雑誌，かく生まれ，かく競い，かく死せり』（出版ニュース社，2004年，48頁）によれば，明治24年（1891）に『女鑑』が創刊された際，《発行の趣旨》において初めて「良妻賢母」という文字が誌面に登場したとしている。

18　『女鑑』第15年第12号，1905年，13～14頁

19　森田千子「美人となるの法」，『女鑑』第18年第２号，1908年，53頁

20　牧田祐太郎「美貌は幸福の要素なり」，『女鑑』第18年第７号，1908年，100頁

21　黒岩比佐子『明治のお嬢様』（角川学芸出版，2008年，168頁）は，『女学世界』の目次を調査し，明治末期は明らかに「化粧法」に関する記事が増えていると述べている。

22　「美人コンテクスト」に関しては，井上章一『美人論』（朝日新聞社，1995年），同『美人コンテスト百年史 ── 芸妓の時代から美少女まで ──』（朝日新聞社，1997年）に詳しい。

23　社説「婦人雑誌の口絵」，『婦女新聞』，1909年４月23日発行

24　ロマーン・ヤコブソン『一般言語学』（川本茂雄他共訳，みすず書房，1973年，191頁）によれば，交話的機能とは，言語的コミュニケーション図式のうち接触（contact）への指向を示すもので，「儀礼化したあいさつのおびただしいやり取りや，会話をひきのばすことを唯一の目的とするだらだらした対話などに現れる」という。

25　例えば，加藤貴裕「引札の研究：正月用引札の実際と系譜」（『日本文化論年報』２，1999年，35頁）

において，以下のように述べられている。「商業史・広告史・広告媒体発達史などの視点から眺めるならば，正月用引札は前近代的な商習慣に根をはった過去の残滓のような存在であり，広告媒体が進化していく過程の一時期に存在した変種・亜種であり，取るに足らないものである」

図版リスト

図１　山中煙草製造所・美作国真庭郡美甘村・廣岡周太郎，25.7×37.4cm，明治36年（1903），坊垣内コレクション

図２　呉服太物商・小出雲・宮下商店，国一，25.7×38.1cm，明治34年（1901），印刷博物館

図３　三府風流万小間物卸小売所・丸亀市渡し場・天狗堂事高木商店，国一画，明治35年（1902），25.8×37.5cm，藤井獎『讃岐の引札　広告に見る明治・大正浪漫』（四国新聞社，1996年）

図４　御菓子製造卸小売商并ニ掛物平菓子一切・鞍手郡直方古町・明治堂事井上星太郎，観明，37.5×51.5cm，明治37年（1904），直方市立図書館

図５　中将湯本舗本店東京日本橋通四，支店大阪大宝寺町堺筋・津村順天堂・大販売伊予大洲中町三丁目岡本氷壺堂，26.3×38.4cm，明治39年（1906），愛媛県歴史文化博物館

図６　石油種油香油水油商・岐阜市益屋町・油金商店，一舟，37.5×51.6cm，明治41年（1908），岐阜市歴史博物館

図７　和洋菓子茶用卸商煎餅各種製造并ニ売薬煙草化粧品販売・芦屋町中小路・小川伊之助，38.0×52.0cm，明治43年（1910），芦屋町歴史民俗資料館

図８　「赤門白粉，二八水広告」『婦人世界』，明治41年（1908）刊

表

番号	制作年	商店名	商品名	サイズ	モチーフ	身　装		行　為	関連
1	明治24	大島魚助	御白粉小町紅卸商	254*379	女1	根結い垂れ髪（尾長・ピンクの元結い），緋袴，檜扇	和	右手に扇を持ち，左手は左方を指差し，左を見ている	
2	明治29	松井よね	売薬洋酒るい石鹸けしよう品各種	不明	女1	唐人髷（花簪，平打簪），和服（小袖）	和	右手に梅の枝を持ち，左を向いている	
3	明治34	徳野彌吉郎	雑貨商	不明	女1	揚巻（花髪飾り），和服（小袖），指輪	和	新聞を読んでいる	
4	明治34	前田志津事藤田悦	染物悉皆	253*373	女2	女性・高島田，和服（小袖），指輪／少女・稚児髷，和服（四つ身振り袖，筥迫）	和	左を見ている	
5	明治34	安藤酒店	諸家有名銘酒大販売并ニ壜詰及洋酒類各種	254*375	女·子2	女性・銀杏返し，和服（振り袖）／少年・短髪，和服（羽織）	和	左を見ている	
6	明治34	宮下商店	呉服太物商	257*381	女2，複数	右の女性・高島田（玉簪），和服（小袖），指輪／左の女性・唐人髷（花簪），和服，指輪	和	反物を見ている	○
7	明治34	昆布屋事大森商店	和洋砂糖菓子商萬昆布干魚塩魚乾物外ニ多ざこ	不明	男·女4	女性・丸髷（簪），和服（紋付羽織，小袖）／男性・短髪，和服（羽織）	和	店主と顧客が談笑している	
8	明治34	鳴海力松	御餅司并ニ米雑穀	256*377	女1	唐人髷（平簪，ビラ簪），和服（振り袖）	和	鏡餅を持っている	
9	明治35	美阪啓助	牛乳搾取販売所	259*375	女1	下げ髪（リボン，花簪），緋袴，檜扇	和洋	扇を持ち，左を見ている	
10	明治35	はまや事藤井商店	呉服洋反物類并ニ嫁入小袖御毎ニ応ず	256*372	女1	高島田（玉簪），和服（紋付振り袖），指輪	和	見本帳を見ている	○
11	明治35	丁子屋支店	綿ネール太物洋反物シヤツ前掛メリヤス類	260*375	女·子2，男4	女性・高島田（花簪），和服（紋付羽織），指輪／少年・セーラー服，男性・短髪，和服	和	買い物をしている	○
12	明治35	はり寅店	京都染物悉皆処并ニ洗張ゆのししゆみぬき	不明	女2，男5	右の女性・丸髷（玉簪），和服（小袖）・左の女性・高島田（くす玉簪），和服（小袖）／男性・短髪，仕事着	和	男性は布を染めており，女性はそれを見ている	○
13	明治35	高木商店	三府風流萬小間物卸小売所	258*375	女2，男4	左の女性・桃割れ（花簪），和服（紋付振り袖）／少女・稚児髷，和服（紋付羽織袴）	和	小間物屋の前で少女に髪飾りを付けようとしている	○
14	明治35	商号田中屋／能登春蔵	呉服商京都染物大取次所	258*375	女1	高島田（玉簪），和服（紋付振り袖），指輪	和	見本帳を見ている	○
15	明治35	黒川商店	呉服卸小売	260*376	女2	花嫁・文金高島田（角隠し，平打簪），和服（黒留袖）／左の女性・丸髷（玉簪，櫛簪，色留袖	和	花嫁と母親が左を向いている	
16	明治35	大澤屋支店	菓子製造卸砂糖掛物類	375*517	女1	高島田（平打簪，花簪），和服（小袖）	和	左を見ている	
17	明治35	山田商店	呉ふく太物并ニ染悉皆	260*374	女1	下げ髪（リボン，花簪），緋袴，檜扇	和洋	扇を持ち，左を見ている	
18	明治35	鍵谷宗七	古銅鉄商	259*376	女1	高島田（くす玉簪），和服（紋付振り袖）	和	生け花をしている	
19	明治36	水口日盛社	諸新聞牛乳搾取販売	257*376	女·子3	左の女性・丸髷（花簪），和服（小袖）／少女・下げ髪（リボン），和服（袴）／幼児・帽子，襟巻，哺乳瓶	和／和洋	女性は左を見ており，少女は赤ちゃんを見ている	○
20	明治36	上岡嘉十郎	萬荒物唐反物商	257*374	女1	唐人髷（平打簪，くす玉簪），和服（振袖，筥迫）	和	筆を持ち，左を見ている	
21	明治36	古座政商店，大阪市西区幸町通三丁目，出張所	海産物木炭材木問屋	394*272	女1	高島田（平打簪），和服（紋付留袖）	和	折り鶴を持ち，左を見ている	
22	明治36	魚九	海川魚商	不明	男·女2	女性・高島田，和服（襷がけ）／男性・髷，漁師の格好	和	鯛漁をしている	
23	明治36	永寿堂廉本五平	和洋砂糖う治茶洋酒罐詰茶器香具御菓子調造所	258*380	女2	左の女性・稚児髷（くす玉簪），和服（紋付振り袖）／右の女性・あげまき（リボン），和服（紋付振り袖）	和／和洋	茶を点てている	
24	明治37	松小店	銘酒販売并ニみそあら物類	不明	女1	高島田（玉簪，鼈甲簪），和服（振り袖，筥迫）	和	傘を持ち，左を見ている	
25	明治37	椎名福次郎	古着仕立物	260*380	女3	下げ髪（リボン），袴	和洋	自転車に乗っている	
26	明治37	福井舗	西洋洗濯其他洋服マント毛織物類染直し洗張しみぬきゆのし	不明	男·女2	女性・束髪（リボン），和服（振り袖）／男性・短髪，軍服	和洋	見つめ合っている	
27	明治37	明治堂事井上星太郎	御菓子製造卸小売商并ニ掛物平菓子一切	375*515	男·女2	女性・冠，レース，ロープデコルテ／男性・軍服	洋	女性が男性に三方を差し出している	
28	明治37	谷南店	履物卸商	375*510	女·子2	女性・丸髷（花簪），和服（紋付留袖）／少女・おかっぱ，和服（四つ身）	和	琴を弾いている	
29	明治37	高田商店	内外砂糖米利堅粉白味噌糀じカタツムリあま酒製造	不明	女3	下げ髪（リボン），袴	和洋	自転車に乗っている	
30	明治37	佐近瀧次郎	呉服太物洋反商并ニ祝儀小袖類	258*373	男·女2	女性・ナース帽，白衣／男性・軍服	洋	見つめ合っている	

31	明治38	尾崎國太郎	三府婦人用小間物雑貨おろし小売	259*374	女1	束髪（下げ髪，花飾り，リボン），和服（吾妻コート，鳥毛のショール）	和洋	羽子板の羽を持ち，左を見ている	
32	明治38	浅田飴特約和漢洋薬舗，岩崎来次郎，浅田飴本店東京市神田区鍛冶町，堀内伊太郎大阪北久宝寺町堺筋浅田飴支店，堀内伊太郎	浅田飴	258*372	女1	丸髷（花簪，簪），和服（振り袖）	和	左を見ている	
33	明治38	竹内商店	竹細工荒物商	不明	女･子2	女性・束髪（リボン），和服（袴），十字架のネックレス／少年・セーラー服	和洋	萬歳という文字を持っている	
34	明治38	初見甚吉	牛乳搾取所	256*371	女･子2，男1	女性・高島田（くす玉簪），和服（振り袖か）／男性・帽子，仕事着／少女・下げ髪（リボン），和服／幼児・襟巻き	和／和洋	牛乳屋と話している	○
35	明治38	稲田松太郎	薬種商并ニ醫用器械／滋養品種々／諸國有名賣薬／職工用薬品／写真用品／舶来和製セメント／絵具染粉／度量衡器販賣	374*515	女1	元禄髷，和服（小袖）	和	短冊と筆を持ち，左を見ている	
36	明治38	孫嘉事羽渕商店	萬小間物類并ニ袋物喜世留諸糸物類	257*375	女･子3	女性・二百三高地髷（リボン），和服（羽織）／少女・白衣／少年・軍服	和洋／洋	左を見ている	
37	明治38	本舗延吉屋良徳山下養春軒	御白粉御眉刷毛調進司	255*378	女･子2	女性・二百三高地髷（花簪，リボン），和服（振り袖）／少年・セーラー服	和洋	暦などを持っている	
38	明治39	岡本郡壺堂，津村順天堂	中将湯	263*384	女1，子4	女性・下げ髪（ビラ簪），ロープデコルテ，ネックスレス，腕輪／少年・ボーダーシャツ	洋	女性は「中将湯」と書かれた旗と暦を持ち，少年達は汽車を引っ張っている（同一）	
39	明治39	本舗本店東京日本橋通四，支店大阪大宝寺町堺筋，津村順天堂	中将湯	260*374	女，子	女性・下げ髪（ビラ簪），ロープデコルテ，ネックスレス，腕輪／少年・ボーダーシャツ	洋	女性は「中将湯」と書かれた旗と暦を持ち，少年達は汽車を引っ張っている（同一）	
40	明治39	吉津屋事齋賀商店	呉服太物并ニ舶来品種々販賣商	522*362	女2	左の女性・束髪（リボン），和服（袴）／右の女性・束髪（リボン），ロープモンタント	洋	アコーディオンとバイオリンを弾いている	
41	明治39	吉田運送店	鉄道荷物運送所	375*515	女1	高島田（花簪），和服（紋付振り袖）	和	短冊を見ている	
42	明治40	花月堂	御菓子司名代かすていら并ニ大白煉羊羹其他菓子種々	262*374	女1	束髪（花簪），和服（振り袖）	和洋	バイオリンを弾いている	
43	明治40	無	無	不明	女2	左の女性・束髪（花簪），ショール，羽織，洋傘／右の女性・束髪（リボン），吾妻コート	和洋	左を指差している	
44	明治40	無	無	258*382	女･子2	女性・束髪（花簪），ロープモンタント，ネックレス，腕輪／少女・束ね髪（リボン），袴	洋	盆栽を持っている	
45	明治40	無	無	260*380	女1，子2，他	女性・束髪（リボン），ロープモンタント，ネックレス／少年・軍服	洋	左を見ている	
46	明治40	岩崎来次郎	中将湯，ヘルプ，童丸	259*375	女･子2	女性・下げ髪（ビラ簪），十二単／少年・セーラー服	和	右を見ている	
47	明治40	無	無	260*380	男･女4	女性・束髪（リボン），ロープモンタント，羽毛のショール，洋傘／男性・モーニング，シルクハット，ステッキ／背景の老夫婦は和服	洋	見つめ合っている	
48	明治40	小森本店	酒類問屋并ニ味噌醤油販売	375*516	女1	高島田（花飾り，ビラ簪），和服（振り袖）	和	布巾を持ち，左を見ている	○
49	明治40	田屋事佐藤福蔵	流行婦人用小間物下駄鼻緒類	257*375	女･子3	女性・唐人髷（花飾り，くす玉簪），和服（振り袖か）／少女・下げ髪（リボン），和服（振り袖）／幼児・帽子，前掛けがついた服	和／和洋	下駄を作っている	○
50	明治40	宮沢薬館	薬染料洋酒缶詰類種々卸小売商	259*374	女1	束髪（リボン），和服（ショール，吾妻コート），指輪	和洋	左を見ている	
51	明治40	齋藤商店	萬小間物并ニ学校洋品類	515*376	男･女2，他	男性・軍服／女性・ドレス／他・軍服	洋	何もせず	
52	明治40	岸本彦次郎	内外果實／乾物雑穀／雑貨販賣／貿易問屋	375*512	男2，女1	女性・元禄髷（元結い，簪），和服／男性・丁髷，和服	和	見合っている	
53	明治40	新町雑貨店	大坂仕入小間物石油砂糖綿足袋敦賀傘蝋燭并ニ酒醤油酢官製煙草	256*375	女1	束髪（リボン），和服（振り袖）	和洋	羽子板を持ち，左を見ている	
54	明治41	油金商店	石油種油香油水油商	375*516	女1	束髪（リボン），和服（振り袖）	和洋	羽子板を持ち，左を見ている	
55	明治41	松井よね	売薬古曽部焼煙草るい石鹸けしよう品各種	不明	女1	束髪（下げ髪，リボン），和服（袴）	和洋	絵を持ち，左を見ている	

56	明治41	安藤米店	米穀仲買精米業	375*514	女1，複数	手前の女性・束髪（帽子），ドレス／男性・シルクハット，コート等	洋	船上で左を見ている	
57	明治41	緑園，同支店緑園	茶并ニ茶道具	260*380	女1	高島田（ビラ簪），和服（紋付振り袖）	和	茶を点てている	
58	明治41	和気支店	書籍筆墨紙舶来小間物巻刻莫其他各種	256*377	女･子3	女性・束髪（リボン），袴／少女・おかっぱ，袴／少年・短髪，セーラー服	和洋	紙を丸めて話をしている	
59	明治41	宇都宮初三郎	反物製造販売并ニ荒物紙雑貨商	262*379	男･女2，他	女性・束髪（リボン），和服／男性・大礼服	和洋	見つめ合っている	
60	明治41	平田豊作	太物穀類荒物商	260*380	女2	左の女性・束髪（帽子），ドレス，ボア／右の女性・帽子，襟のついたドレス	洋	気球に乗っている	
61	明治41	川淵商館	洋庫各種三府流行履物種々大蔵省指定煙草舶来雑貨毛布帽子足袋シャツズボン下装束類製造販売	257*375	女2	左の女性・束髪（帽子），ドレス，ボア／右の女性・帽子，襟のついたドレス	洋	気球に乗っている	
62	明治41	玉清丹本舗村木隆甫大阪市高津黒焼元祖鳥谷代理店	和漢洋薬種医術器械類内外有効売薬各国洋酒正真黒焼絵の具香具類医薬製造業	242*369	女2	左の女性・束髪（帽子），ドレス，ボア／右の女性・帽子，襟のついたドレス	洋	気球に乗っている	
63	明治42	無	無	258*382	女1	束髪（リボン），和服（紋付振り袖）	和洋	羽子板を持ち，左を見ている	
64	明治42	奥野商店	米穀商	255*380	女1，複数	手ぬぐい，小袖，手甲，脚絆，裾よけ	和	田植えから収穫までをしている	
65	明治42	無	無	258*382	女2	右の女性・唐人髷（複数の花飾り），和服（振り袖）／左の女性・高島田（複数の花飾り），和服（振り袖）	和	見つめ合っている	
66	明治42	矢野竹三郎	反物製造販売卸商	260*378	女1	束髪（リボン），和服（紋付留袖か），懐中時計	和洋	バイオリンを持ち，左を見ている	
67	明治43	小川伊之助	和洋菓子茶用卸商煎餅各種製造并ニ売薬煙草化粧品販売	380*520	女1	束髪（リボン），和服（振り袖）	和洋	髪飾りをつけようとしている	
68	明治43	三谷屋酒店	清酒焼酎味醂醸造販売	258*376	女1	丸髷（檜簪），和服（吾妻コート）	和	右を見ている	
69	明治43	いなば屋事高橋喜太郎商店	ランプ荒物并ニ雑貨商	516*371	女･子2	女性・高島田（くす玉簪），和服（振り袖）／少年・軍服，マント	和	女性は鶴が描かれた羽子板を持ち，少年は「亥」と書かれた凧を持ち，左を見ている	
70	明治43	田中幸次郎	塩肴乾物商并ニ諸紙	521*374	男･女･子3	女性・おすべらかし，平額，十二単，檜扇／男性・軍服／子供・セーラー服	和	見つめ合っている	
71	明治43	萬屋半右衛門	各国有名売薬蝋燭筆墨各国紙類其他雑品	246*364	女1，男2	女性・唐人髷（花飾り），和服（振り袖）／太夫・折烏帽子，素袍／才蔵・頭巾，袴	和	左を見ている	
72	明治44	富岡商店商号堺重	各種製綿	257*378	女1	束髪（下げ髪，リボン），和服（振り袖），扇	和洋	扇を持ち，左を見ている	
73	明治44	松井庄次郎	米穀雑品商	378*517	女1	束髪（リボン），和服（振り袖）	和洋	羽子板の羽を持ち，左を見ている	
74	明治44	三好染店	綛染所	376*516	女3	中央の女性・高島田（花飾り，檜簪），和服（振り袖）／右の女性・おそめ髷（花櫛，ビラ簪），和服（振り袖，だらり帯）／左の女性・おそめ髷（花櫛，ビラ簪），和服（振り袖）	和	見合っている	
75	明治44	蘇生アミドピリン特約店佐藤與一郎商店	中将湯／中将球	255*380	女2	左の女性・束髪，ショール／右の女性・下げ髪，十二単	和洋	自動車に乗っている	
76	明治44	商號松佐高山忠次郎	生魚かまぼこ商	262*380	女1	束髪（下げ髪，リボン），和服（振り袖）	和洋	暦などを持って，左を見ている	
77	明治44	麻田商店	呉服洋反醤油肥料其他雑品	373*515	女3	中央の女性・高島田（花飾り，檜簪），和服（振り袖）／右の女性・おそめ髷（花櫛，ビラ簪），和服（振り袖，だらり帯）／左の女性・おそめ髷（花櫛，ビラ簪），和服（振り袖）	和	見合っている	

＊【モチーフ】の「女」「男・女」「女・子」とは，例えば，「女」とあるのは女性単独，「女・子」とは母子などのペア，「男・女」とは男女のペアを指す。その後の数字は画面中の人数を示している。
＊【モチーフ】の横の「和」「洋」「和洋」はそれぞれ和装，洋装，和洋折衷の服装を示している。
＊【行為】中の「左を見ている」はとりたてて具体的な行為をしていない状態を示す。
＊【関連】は，商店が取り扱っている商品と図像内容との間に直接的関連がある場合○で示している。